

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年八月六日(土曜日)午後六時三十分開演

演目解説(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

## 狂言 蟹山伏(かにやまぶし)

大峰・葛城の修行を終えて意気揚々と下向する羽黒山の山伏が、強力と二人でのさびしい深山にさしかかりました。どうどうと鳴る音がし、真っ黒になつたかと思うと、謎めいた名乗りをし、横に跳ぶ者が出て、これを蟹の精と解いたまでは、山伏もさすがに生き不動です。ところがちよつかいを出して蟹に耳を挟まれた強力を助けようと唱える呪文は怪しげですし、効き目がないばかりか自分も耳を挟まれ、二人とも突き倒されます。

## 能 三笑(さんしょう)

晋の惠遠(シテ)は三十年余廬山に住んでここを出ることなく、白連社を結ぶ同志と仏道を修行する傍ら、たとえば夜明けの山に雲から落ちる滝の白さを認め、心洗われる閑居を楽しんでいました。そんな惠遠の草庵を野山が紅に染まる霜降り月の一日、陶淵明(ツレ)と陸修静(ツレ)が訪れ、石橋を渡り巖に腰を掛けて三人で滝を眺めます。万仞の布を晒したような、香炉から紫煙の立ちのぼるような、三国無双の滝に魅せられ、打ち解けた三人は酒杯を手に経歴を語り合い、互いに尊敬の念を新たにします。菊水の杯を飲み重ね童子(子方)の舞に誘われて惠遠自らも酒狂の舞に興じた後、ふらつく足取りで石橋を渡り淵・陸二人が介錯しますが、虎溪を出ぬとの惠遠の禁足をこうして破ったことに気づいた三人は、手を打ちどつと大笑します。禅林に流行した虎溪三笑の故事を本説として新しい趣向に挑んだ本曲の作者は、慈雲院細川成之という室町中期の風流武士とされます。

(西村 聡)

装束附 シテ(惠遠禪師) 沙門帽子又は唐帽子をかぶり、厚板を着附に着、

白大口をはき、上に水衣を着て、腰帯をしめ、掛絡をかける。